



英語を学ぶ視点

高梨庸雄 Takashi Tsuneko

2006（平成18）年度版 *NEW CROWN ENGLISH SERIES* は現行教育課程の方針をどのように具体化しているか。今回は「英語を学ぶ視点」から述べることにする。現行教育課程では「自ら学び、自ら考える力」がキーワードのひとつになっている。これは平成8年に出了れた中央教育審議会第一次答申の中にある「生きる力」を育成するための方針のひとつである。それを英語科の教材において実現するには、次のような3つの視点が必要であろう。

1. 「語学」ということばに対する従来からのイメージには“丸暗記”、“文法”、“訳読”などがあって、新しい指導理念で始められた教育が期待された成果を上げることができないと、我が物顔に息を吹き返すのが通例であった。しかし、それらのイメージに共通するのは、「自ら考える」ことを放棄して英語圏の人の発話行動を一方向的に受け入れる受動的学習スタイルである。特に最近の子どもたちは“指示待ち族”と揶揄されるほど、自ら考え、自ら判断することを避けようとする傾向がある。しかし、語学学習で大事な視点は *personalize*（自分で考え、自分で判断し、自分で使いながら得たものを自分の経験とするということ）である。これを実現するためには、ことばについて考える題材が必要である。

2. 好むと好まざるとにかかわらず、英語は現在、自国語で意思の相互伝達ができない場合のコミュニケーションの手段として、最も利用されている言語である。そのようなコミュニケーションでは、話し手が意識しなくても、国、地方、階級、民族などのいろいろな言語習慣が入ってくる場合がある。例えば、それぞれの文化圏に特有の思考パターンや行動

様式などである。中学生がやがて社会人となり外国の人々と交流する機会に出会ったとき、文化や歴史の違いを越えてお互いに理解しようとする心が大切であり、異文化への寛容が求められる。そのような国際的感覚を養うためには、生徒の世界観を広げるのに役立つ題材が必要である。

3. 国際理解、異文化交流は本来、双方向コミュニケーションであるから、基本的に *give & take* の精神が必要である。海外から得ようとするばかりで自分の国から発信しないのは、受信機はあるが放送局を持たないようなものである。中学校レベルで明日からでも発信するためには、まず自分の郷土や国の文化に対する理解と誇りを持つことである。そして、自分の英語でそれを発信する勇気を持つことである。そのための基本的なこととして、英語の授業で学ぶことを時には日本語と比較したり、ALTのジェスチャーに注意したりしながら、文章やスピーチで効果的に自分の考えを述べるにはどうすればよいかを考えることである。外国語を学ぶことは、生徒に自分の国を客観的に見る機会をもつことになり、自国の文化のユニークさに気づく機会ともなる。

NEW CROWN では、これらの視点を大切にしていて教科書づくりを行ってきたのである。

たかなし つねお

京都ノートルダム女子大学大学院教授。専門は英語教育学。目下の関心事は「評価」（特に、生徒の英語力、並びに教師の英語力・指導力）。著書は『英語の「授業力」を高めるために』（三省堂）、『英語リーディング事典』、『英語コミュニケーションの指導』（研究社）他多数。

特集 英語を学ぶ視点の育成

ことばを学ぶ上での
気づきを大切に

森住 衛 (桜美林大学)



はじめに

本稿の目的は、「英語を学ぶ視点の育成」を2006(平成18)年度版 *NEW CROWN* (以下、18NC)にどのように反映させているかを論ずることである。特に、ことばを学ぶ上での気づき、動機付け、学び合いという点で、具体的に教科書の題材や教科書構成でどのように工夫しているかを取り上げる。

英語科に限らず、ほぼすべての教科に共通することであるが、学習の対象になるのは、知識・技能・態度の3つである。このうち「態度」はしばしば「視点」とも置き換えられる。筆者も「視点」とか「観点」を使っている。この3つは相互に関係があり、重なり合うところもあるが、あえて区別して英語科に当てはめると、以下ようになる (cf. 森住「教科書を支える3つの理念」、『三省堂英語教育中学編』, 1997.2)。

知識	知る	基礎・基本
技能	使う	コミュニケーション
視点	判断する	言語観

さらに、この知識・技能・視点を、教科書で取り上げる領域で大別すれば、言語材料・言語活動・題材になる。この3つは、しばしば、教科書分析を行う際の大きな分類項目と言っても差し支えない。つまり、「この教科書は言語材料をどう扱っているか」とか、「4技能のバランスをとっているか」とか、「題材にどのような特徴があるか」などの議論のポイントということになる。本誌 (*TEACHING ENGLISH NOW* 特別増刊号) では、1号で「言語材料の基礎・基本」を中心に特集した。そして、2号では「英語

を使う技能の育成」を特集してきた。そして、本号では「英語やことば全体に対する視点の育成」を特集している。これで一連の3つの柱が出そろおう。

「視点」とは何か

ことばに対する視点とは、一言で言えば、言語観である。左記の一覧でも「視点 判断する 言語観」と並べたのはこの由縁であるが、これだけではわかりにくい。言語観とは、極言すると、次のような判断に対してどう対処するか、簡単にいえば、YesかNoかの問題である (cf. 森住「英語教育の根本を考える」横川博一編『現代英語教育の言語文化学的諸相』, 三省堂, 2001)。

- ・ある国や地域に行ったら、あいさつぐらいはその国や地域のことばを使う。
- ・国際理解の原点は互いにことばを学び合うことである。
- ・少数民族や先住民族のことばは消滅しても仕方がない。
- ・ことばの学習はスキルの習熟に専念すればよい。
- ・「英語が話せる＝国際人」である。
- ・日本式英語の使用は恥ずかしいことではない。
- ・Queen's Englishは正当で美しい。
- ・日本でも英語を「第二公用語」にしたほうが、国際通用力が増す。

このような視点を取り上げるのは重要である。なぜならば、ことばに対する興味・関心だけでなく、ことばのありように対する気づきも喚起させるからである。さらに、大切なことだが、外国語の知識や技

1年
LESSON 8

Can you read these words?
Yes, I can.
They are *hito* and *ki*.
Right. They mean 'person' and 'tree'.
Can you read this word too?
No, I cannot.
Please help me.
The person is by the tree. Guess.
OK.
Does it mean 'rest'?
Right. Yasumi. Good.

★ **POINT**
You can swim.
Can you swim?
— Yes, I can. / No, I cannot [can't].

★ **CHECK IT** ①聞いてみよう ②話してみよう

these mean person cannot by guess rest (can't) cannot

Paul: I like language games. Now, this is an English one.
Kumi: OK. I'm ready.

STAND I

Kumi: What are those two words?
Paul: They make a sentence. What is it?
Kumi: I can't answer. It's difficult without a hint.
Paul: OK. This is a hint. Where is 'I'?
Kumi: Oh, Paul. "I understand."

★ **POINT**
Tom can play the piano.
Tom cannot [can't] play the piano.

★ **CHECK IT** ①聞いてみよう ②話してみよう

these make sentence answer difficult without
understand hint ヒント

能があっても、この視点を誤ると、相手を傷つけたり、陥れたりすることになる場合があるからである。つまり、知識や技能を使う前提の判断を誤ると、反国際的にもなるし、反人間的にもなる。しばしば、英語が堪能であっても「国際人」といえない人がいるのはこの由縁である。このように視点や言語観は、根本に関わっているので、言語教育の理念に関わる問題ともいえる。

本課の題材からみることばへの気づき

以上のような言語観や英語観がどのように 18NC に具現されているだろうか。まず、本文の題材からみて主なものをいくつか取り上げたい。

1年 第8課 Language Games

一方が相手の言語を学ぶだけの人間関係には真の平等はない。異文化理解もない。しばしば、英語のような大言語に対しては、この弊害に陥ることがある。この課では、「ことばって楽しいね」という気づきのもとに、久美（日本人）がポール（アメリカ人）に日本語を教え、ポールが久美に英語を教えている。つまり、ことばの学び合いである。さらに、日本語（漢字）の成り立ちや英語の word play も取り上げている。広い意味でのメタ認知・メタ言語能

力を扱っている。この種のことばの由来やことば遊びを知っていれば、会話や文通などの動機付けになるし、話題づくりの一助にもなる。

1年 LET'S READ 2 Alice and Humpty

アリスとハンプティ・ダンプティーとの有名な対話を取り上げている。

Does a name mean something?

— Of course it does. My name means my shape. のやりとりは、指導の仕方によっては、意味論の相当深い気づきを与えることができる。自らの個性 (identity) や存在理由 (raison d'être) も考えさせることができる。簡単な英語で深い内容の提示という NEW CROWN が伝統的に志向してきた特徴の典型的な事例といえる。

2年 第1課 Life in Australia

第3セクションで、オーストラリア英語の特徴に言及している。例として "Ta." (Thank you.) と "G'day mate." (Good day, mate.) を出している。これだけでも、オーストラリア英語の表現や発音について導入するきっかけになる。また、時間に余裕があれば、国際補助語としての 'Englishes' の言語観にまで言及できる。このような視点が中学時代

に生徒の中で育成されていれば、生徒は英語国やその他の外国を初めて訪れたときに、学校で習っている英語との違いに驚いたりしなくなる。

2年 第4課 Ainu

この課の最初のページでは、北海道の地名はアイヌ語に由来するものが多いことを取り上げている。これもことばへの気づきの一助になる。また、第3セクションのアイヌ語学習では、少数・先住民語を世界の財産として存続させたいと思う気持ちと互いの学び合いが底流にある。なお、本文には書けなかったが、アイヌ語の *Irankarapte* (イランカラプテ=こんにちは) の原義は「あなたの心にちょっと触れさせてください」である。これは筆者の知る限り、世界で最も美しい由来を持つあいさつである。

3年 第8課 Sharing with Language

手話を使う人たちが登場する映画「アイ・ラブ・ピース」を見て、手話をはじめようになったという内容の課である。メッセージは、手話への思い、表情やジェスチャーが大切なこと、たくさんの人たちと感情や意思を分かち合いたいという積極的コミュニケーションの姿勢である。そして、これが英語についても言えること、さらには、英語以外の言語、たとえば、中国語やヒンディー語、韓国・朝鮮語を習って、自分の世界観を豊かにしていきたいと結んでいる。まさに、ことばへの気づき、学んで使うという動機付けが満載の課である。

本課以外から見ることばへの気づき

教科書で本課以外という場合は、狭義では、本課に対立する活動部分である。NEW CROWNの現行版でいうならば、〈LET'S TALK, LET'S LISTEN〉などである。18NCにあてはめると〈DO IT〉である。広義では、見返しから始めて、〈WORD CORNER〉や〈SOUNDS〉、そして付録などすべてとなる。教科書がどのように構成されているかということなので、一般に「教科書構成」とも呼ばれる。ここでは、後者の広義からみて、題材に気づきや動機付けという点で言語学習の視点が色濃く出ているものを取り上げる。

2年 DO IT – WRITE 1

「将来の夢は日本語教師です」

モデル文には、日本語教師になりたい理由として、
I like to talk with foreign people. I can teach them about Japan and Japanese culture. I can also learn many things about their lives and cultures.

とある。ことばを使って積極的にコミュニケーションをはかりたいという動機付け、教えるだけでなく自分も彼らから学びたいという双方向性が如実に出ている。

3年 DO IT – LISTEN 4

「ことばを学ぶ意義は？」

タイトルを見ればわかるが、文字通り、外国語を学ぶ意義を取り上げている。それも、一般に題材が軟弱と言われるリスニングの活動として、である。その意義とは、外国語を学ぶことによって、相手の考え方を知る、文化を知る、自分の母語や文化がわかる、の3点である。まさに、ことばを学ぶ動機を真正面から取り上げている活動といえる。

〈表見返し〉

1, 2, 3年とも「ことばとコミュニケーション」を取り上げている。NEW CROWNは伝統的に、ことばへの気づきや学習の動機付けの視点から見返しを活用してきているが、18NCでは、これをさらに強化して、この標題の下に、1年は「聞く・話す」、2年は「読む・書く」、3年は「表情・ジェスチャー」としている。各学年共通して日本語で書かれているメッセージは、「考える (Thinking)」を真ん中に据えて4技能で固めるというコミュニケーションのあり方を真正面から子どもたちに訴えている。暗記してもらいたい日本語のうちの1つである。写真からも何らかの気づきを得るに違いない。

〈裏見返し〉

1, 2, 3年とも「世界の言語」を取り上げている。これもことばを学習する際の視点に関係している。「英語」という「科目」は、「外国語」という「教科」を代表している。聞くところによると、韓国では選

表見返し



択必修で他の6つの外国語を出すという。これができない我が国では、英語の授業を通して広く外国語への気づきを促すしか方法がない。

〈SOUNDS〉

18NCでは、新しい試みを加えている。たとえば、2年の6ページである。‘Problem’ と ‘Thank you.’ あるいは ‘afternoon’ と ‘What’s your name?’ のように単語と文を比べて、音節の数とリズムが同じであることを取り上げている。このような認知的な気づきが英語の理解につながり、学びたいという動機付けを促す。

〈単語の意味〉

「単語の意味」は NEW CROWN が伝統的に取り上げていて、他の教科書との「区別性」が著しい付録である。18NCでは、さらに自分で辞書を調べるにはどうしたらよいか、というのを取り上げている。動機付けに役に立つ。

〈文法のまとめ〉

これも NEW CROWN 独特の扱いである。わかりやすさを追い求めた工夫を施した。特に、絵や図を通して文法や文型のしくみをわかりやすく説明して

いる。Be 動詞や完了形などでは、従来の文法説明を越えた気づきも目指している。

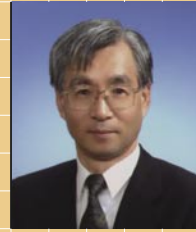
おわりに

総じてみると、NEW CROWN はことばに関する題材が多い。今回は言及しなかったが、1年第1課の日本人の氏名の言い方も、英語を学ぶ上での視点や判断の問題である。また、3年最後の Reading Plus は、主たるテーマは人間教育の「勇気」であるが、本文はほぼ ‘courage’ の定義の羅列である。定義はことばによってなされるという点で、もともとことばの問題である。教育とは何か、人間とは何か、愛とは何かなどなど、すべてことばで考える。このように、NEW CROWN には、いたるところにことばへの気づきが仕掛けてある。その理由は、ことばへの気づきを多くすることが、英語教育が担うことばの教育としての権利と義務だからである。権利だから、ことばについての話題が多くてよいのである。義務だから、ことばについての話題が多くなければならないのである。これが、異文化理解教育や人間教育の点で、社会科や道徳との違いである。本教科書で、生徒たちと一緒にことばの大切さ、楽しさ、偉大さ、不思議さを存分に味わっていただきたい。

特集 英語を学ぶ視点の育成

英語教育で
世界観を広げる

高橋 貞雄 (玉川大学)



1. 多文化教育の必要性

英語教育の目的は、英語という言葉教え、英語でコミュニケーションができるようにすることだけではない。言うまでもなく、英語は外国語のひとつである。したがって、英語を通して英語圏の文化だけでなく、世界のさまざまな文化を学ぶ機会を提供することが英語教育の目的のひとつである。このことは、学習指導要領の「指導計画の作成と内容の取扱い」の中でも明確に述べられている。

さて、国際化が進む中でボーダレスな社会は予想以上のペースで現実的なものになってきている。例えば、駅や地下鉄の案内は中国語や韓国語などの複数の言語で標示されている。何年前にはあまり考えられなかったことである。これは、多民族・多文化社会が現実化していることの証である。これからの社会を担う日本の子どもたちは、国際社会の中だけでなく、日本の社会においても多文化と向き合っ生きていかなければならない。

米国などでは以前から、multicultural education (多文化教育) が行われている。これは、さまざまな言語や文化を持つさまざまな民族がお互いの違いを乗り越えて、どのように共生していくべきかを教えるものである。日本には、従来から単一言語・単一民族社会という狭い考えがあり、多文化教育はあまり行われてこなかった。しかし今世界を見たときに、日本的な考え方や米国的な考え方だけでは成り立っていないことは明らかである。中学生のような澄んだ目、柔軟な心を持つ段階においてこそ、世界を見る態度や価値観の違いを受け入れる心を養うべきだと思う。

2. 自文化発信の前提

現在、英語教育に求められていることは、単に異文化を理解するだけでなく、自己表現能力を身につけ、積極的に日本文化を発信することのできる力の育成である。しかしだからといって、日本の祭りやスポーツを単に英語で言う練習をすれば、その力が養われるのであろうか。大事なことは、世界の文化やものの見方・考え方を学び、それに対して「日本ではこうする」、「自分はこう思う」という表現する態度の育成である。その意味では、比較文化的なアプローチはとても重要である。つまり、異文化吸収型でもなく、自文化発信型でもなく、文化交流型の教育が、これからの英語教育に求められるのではないか、と考える。

3. 気づきを与える題材

多文化教育を行い、世界観を広げることの重要性を述べてきたが、では、教科書はどうあるべきだろうか。簡単に言えば、文化に対する気づきを与え、それを自分に照らして考えさせるようなアプローチを取ることである。たとえば、ニューヨークに自由の女神像があるとか、ロンドンにビッグベンがある、といった観光旅行的なアプローチは文化教育としては物足りない。「知識」以外の気づきを与えてくれないからである。

ここで、2006 (平成 18) 年度版 *NEW CROWN* で新たに多文化教育を想定して用意した題材をいくつか紹介しておきたい。

① 1年 LET'S READ 1 What Do You Treasure?

これは、世界のいろいろな国の子どもたちがやり

取りをしながら、それぞれの「大切なもの」「宝物」について語っている読み物である。この中で、例えばスリランカの少女チャキラは「木」が自分の大切なものだという。日本で、木が自分の宝物だと言う中学生はどれだけいるだろうか。ここでは、価値観は国によって、人それぞれによって異なるのだ、ということが題材である（先のスマトラ沖地震でチャキラは無事だっただろうか、大切な木は残っているだろうか、と感情移入のできる子どもが出てくればうれしいものである）。

② 2年 LESSON 6 Ratna Talks about India

インド出身のラトナが、インドのことを紹介しているレッスンである。インドは、承知のように、多言語、多文化国家である。その意味で、インドを題材として取り上げること自体が多文化教育になるとも言える。この中で、ラトナが bandanna や shampoo がインドの言語のひとつであるヒンディー語からきていると教えてくれる。日本の子どもたちにしてみれば、馴染みのある「バンダナ」や「シャンプー」は当然英語に由来すると思うであろう。ここで、英語は実はさまざまな言語や文化が入り込んだ言語である、ということを知ることができる。これが「気づき」を生む。日本の子どもたちが、日本語も英語に入っているかもしれない、と考えることができれば成功である。

③ 3年 LESSON 3 Kumi Visits China

日本人の久美が姉妹都市の交流で中国の北京を訪れる。そこで気づいたことを友だちにメールで知らせてくる設定である。久美は、ホームステイ先の夕食にご馳走がたくさん出てきて食べきれずに残してしまう。しかし、中国では食べ物を残しても問題はないという。日本では、出された食べ物は残さずに食べるのがエチケットだと思っている久美にとって、これは新鮮な異文化体験であった。同じアジア圏であっても、食文化にちょっとした価値観の違いがあることを気づかせてくれるレッスンである。

④ 2年 LET'S READ 2 Zorba's Three Promises

これは、猫のゾルバとカモメの交流を描いたストーリーである。「約束」をテーマにした感動的物語であり、多文化教育を第一に想定しているわけで

2年 LESSON 6

ラトナが友だちにインドのことを紹介しています。

① Ratna: This is a photo of my sister.
Ken: Oh. What's she wearing?
Ratna: A sari.
Ken: It's beautiful.
Ratna: Thank you. She likes wearing a sari. And you like wearing a bandanna, don't you?
Ken: Of course.
Ratna: The word 'bandanna' is from Hindi, an Indian language.
Ken: Really?
Ratna: Yes. There are many Hindi words in English, for example, 'shampoo'.

★ I like soccer. I like playing soccer. ●★ 好きなことを紹介しよう

CHECK IT ① 聞いてみよう ② 読んでみよう

photo	wear	don't you?	sari	bandanna
[fotou]	[wear]	[dun't ju: ?]	[sari]	[bandanna]
Hindi ヒンディー語	Indian インド	shampoo シャンプー		
[hindi]	[indian]	[ʃampju:]		

52 My-foo

はない。この話の中に、ゾルバがカモメのひなに飛ぶことを教える場面がある。ゾルバに育てられたカモメのひなは、自分が猫だと思っており、なぜ飛ばなければならないのかと言う。そこでゾルバは次のように言い聞かせる。

You are a gull. I am a cat. Cats do cat things.

Gulls do gull things. Each is good. Each is different. We must respect differences.

新版の NEW CROWN はこのようなところにも、それぞれの文化やアイデンティティを尊重する種を仕込んでいく。

4. 他との関係づくり

今の子どもたちは生きる世界が狭い、とよく言われる。自分の興味のある遊びや勉強、そしてわずかな友人としか関わろうとしない。たとえ小さな気づきやきっかけであっても、子どもたちの視野を広げるサポートが必要である。NEW CROWN で学ぶ子どもたちが、英語の授業を通して他の世界との関係を築く糸口を見つけ、それがこれからの国際社会、多文化社会で生きていく力になってくれることを心から願っている。コミュニケーション能力の育成も、もとをたどれば他者との関係づくりから始まるので

特集 英語を学ぶ視点の育成

English for Intercultural Communication

Lynne Parmenter (Waseda University)



With over 340 million first language speakers, over 500 million second language speakers and billions of foreign language speakers, English is indisputably an international language (Ethnologue). In every continent, from Canada to the Cook Islands, the USA to Uganda, Ireland to India, Belize to Brunei, Malaysia to Malta, English is spoken as a national or official language. And yet the chances of speaking English with a native or near-native speaker are much lower than the chances of speaking with a learner of English as a foreign language. There are far more learners of English as a foreign language in China than speakers of English in the UK, for example! In a business meeting between Japanese and Chinese officials, the language used is often English. In the multinational teams undertaking relief and reconstruction work in Asia after the December 2004 tsunami, the language used is often English. When Japanese tourists visit Italy or France or Thailand on holiday, the language they use is usually English.

Thinking in this way, English is less a 'foreign' language than an 'intercultural' language. English is not only a language that 'they foreigners' speak. English is so widespread that it does not 'belong' to anyone. No-one 'owns' English. It is a language that anyone can use as a means of accessing hundreds of other cultures and billions of other people. In this respect, it really is a key to the rich treasure box of the world. Approached from this

perspective, English teachers at junior high school in Japan open up the first step on the road to the world for approximately 1.2 million children every year.

In this first stage, at junior high school, motivation is extremely important. A small minority of junior high school students are naturally motivated by the challenge of learning English vocabulary and grammar, but a substantially larger number are motivated by the attraction of English as a means of communication with people of many other cultures. In the revised *New Crown* series, this natural advantage of English is maximised. Through the three textbooks, students are introduced to a variety of countries and cultures, including the USA, UK, Australia, India, China, New Zealand, Sudan, Mongolia, South Korea and Cambodia. They are given opportunities to think about and talk about intercultural communication and the similarities and differences between cultures.

As a general rule, the main countries featured in *New Crown 1* are countries in which English is a first language, such as the USA and UK. The importance of English as an international language, however, is emphasised by the introduction of conversations between non-native speakers at a very early stage (Lesson 1). *New Crown 2* begins with another country where English is a first language, Australia, but then focuses mainly on countries where English is an official language, such as India.

MORIZUMI
MAMORUTAKAHASHI
SADAOLYNNE
PARMENTERMORINAGA
MASAHARUTAKEUCHI
OSAMU

3年
LESSON 3

LESSON
3 Kumi Visits China



- What do you know about China?
- What do the signs mean?

ninethen 19

久美は朝練都市の交通で中国の北京を訪れています。いろいろな異文化体験をしているようです。

①

Dear friends,
I arrived in Beijing yesterday.
I've just finished dinner. The Yang family made a lot of delicious food.
We left a little food on the plates. I've already learned that this is OK here. If you eat everything, it means you are still hungry. If you leave a little, it means you are full and happy. Like me!

Your friend,
Kumi

★ I finished dinner two hours ago.
I have just finished dinner.

CHECK IT ①聞いてみよう ②読してみよう

① arrive finish [arɪv] [fɪnɪʃ] ② delicious [dɪ'lɪʃəs] ③ plate [pleɪt] ④ already [ə'deɪlɪ] ⑤ everything [evrɪθɪŋ] ⑥ still [stɪl] ⑦ hungry [ˈhʌŋgri] ⑧ leave [li:v]

I've = I have Beijing 北京 Yang 楊

20 twenty

In *New Crown 3*, countries in which English is used as a second or foreign language, such as Tanzania and China respectively, feature more prominently. In all cases, the cultural content is designed to appeal to junior high school students, to widen their horizons, and to increase their motivation for language and culture study.

At the same time as teaching about cultures of other countries, *New Crown* encourages students to make comparisons between Japan and other cultures, not for the purpose of proving 'difference' or 'uniqueness', but for the purpose of genuine intercultural learning and understanding. The textbooks also provide opportunities for students to examine various cultures within Japan, such as Okinawan and Ainu cultures. This helps to develop students' awareness that intercultural competence is not just something 'foreign', but is also relevant to Japan. The ability to 'decentre' and look at one's own culture in the same terms as one looks at another culture is important. The acquisition of this skill enables students to relativise their own culture in transcultural terms, an essential skill for

successful intercultural communication.

In this way, *New Crown* can be used to help students to acquire a broad knowledge of a variety of cultures, and to develop the skills of being able to discuss and express their opinions in English with people of different cultures. If they can simultaneously develop tolerance for other people and viewpoints, together with positive attitudes towards intercultural communication, then they will be well on the way to being competent intercultural communicators.

Junior high school English teachers have a vital role in shaping and encouraging young people's identities in the world and views about the world. If *New Crown* can be used to help young people to mature into knowledgeable, tolerant adolescents capable of understanding and analysing cultures and societies as well as communicating in English, this can only be a good thing for the future of the individuals concerned as well as society as a whole.

Reference
Ethnologue
http://www.ethnologue.com/show_language.asp?code=ENG Accessed 10 March 2005

特集 英語を学ぶ視点の育成

自己表現につながる
英語教育を求めて

森永正治 (北海道教育大学)



はじめに

筆者の大好きな英語教育目標論は、故ライシャワー駐日大使のもので、大きくは Personal Enrichment と Utility の2つであり、後者は「読むこと」と「自己表現」というものです。氏は、我が国が諸外国としっかりと対話してこの地球社会を生き抜いていくためには、外国語、それも主として英語の実践的なコミュニケーション能力が子どもたちに育成される必要があると強調しました。現在の中学校レベルでの英語教育は、遅まきながら氏の願っていた路線にあるように思われます。英語を話したり書いたりして自分の考えを外国人に理解してもらったり、あるいは直接口頭で話し合える能力は、これからの社会では極めて重要なものです。中学校の最初の段階から発音や自己表現をきちんと学習させることが大切になってくるわけです。

英語学習の一番の喜びは、自分の考えを人前で、しっかり・はっきり・堂々と発表できた時に味わえるものであり、このことは、例えば英語スピーチ大会や暗唱大会等に一度でも参加すればわかることでしょう。あるいは、日本のことを尋ねる外国人の質問に、満足のいく答えができたときにも感じるかもしれません。これは *NEW CROWN* が重視している「日本文化の発信」の姿とも重なります。自己表現能力の開発と比較文化的な態度の育成の具体的な第一歩を、すべての学習者に、中学時代に一度は体験させることは極めて意義深いものだと思います。

この貴重な経験を得させるために、日常の授業ではどのようなことに注意しなければならないでしょうか。英語は生徒諸君の日常生活では何分の一かの小さな部分しか占めておりません。したがって、他

教科の学習においても、日々の生活においても、様々な事柄を母語である日本語で深くよく考える習慣を身につけさせる必要もあります。そして、英語教育の立場から言えば、だんだん英語でも考えられるようにさせなければなりません。

NEW CROWN は、本課本文の学習が、すぐ次の DO IT シリーズに有機的に連動し、最終的には総合的に自己表現・発信活動につながるように配慮していますので、教科書の内容のすべてが、学習者の血となり肉となって、生涯を通して、生きて働く大切なものになると信じています。

では、学年ごとに少しずつ見ていこうと思います。

1年生の場合

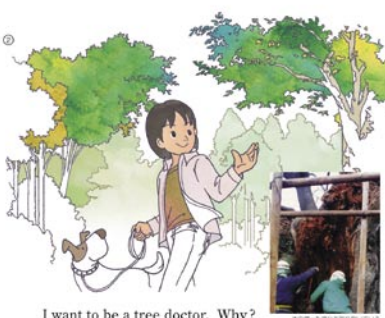
現行版と同じように、自己表現の基本は、「名前」であるとの考えから、「氏十名」を提唱しています。英語による自己紹介を生涯で何回くらいすることになるかは、一人ひとり異なるでしょうが、その第一歩がここにあります。いつ必要になっても、ゆっくり・はっきり・しっかり・明るい声と笑顔で言えるようにしたいものです。1年生では他にも、自分の好きなものを紹介したり、数について言ったり、自分がしたことについて言ったり、というように、様々な自己表現の場面が出てきます。1年生の時の楽しくくつろいだ雰囲気での学習・表現・発信活動が、その後の学習を左右しますので、特にいつでも気持ちよく発表できるような配慮が大切です。

2年生の場合

先にも触れましたが、自己表現の最たるものは英語によるスピーチでしょう。

たとえば自分の夢を英語で話してみる経験は、長

2年 LESSON 5



I want to be a tree doctor. Why?
First, I like trees. In spring, I go to the park to see trees. Fresh leaves cover the trees. The trees are growing. They are beautiful.
Second, some trees are sick. We must take care of them.

★ Koji went to the park.
Koji went to the park to play soccer.

CHECK IT—①聞いてみよう ②読んでみよう

doctor fresh leaves leaf cover grow sick care take care of

[dɒktə] [frɛʃ] [li:vz] [li:f] [kʌvə] [grəʊ] [sɪk] [keɪ] [teɪk keɪ əv]

forty-five 45

い人生の中で大きな意味をもつものです。第5課はそのような内容で、久美が樹木医になりたいという夢を語ります。久美が3つの理由を挙げながら、生き生きと話す様子を中心に学習が展開することになります。一人ひとりの学習者には、先ず久美になったつもりでしっかりと暗唱し発表してもらいます。次に、DO IT — WRITE 1で、自分の夢について一人ひとり十分に時間をかけて、スピーチの原稿づくりに取り組ませます。自分の夢の理由も最低2つくらいは挙げさせます。そして何度も音読練習し、暗唱し、クラスの中で発表します。発表に際しては、TRYにも挙げられている事項「大きな声・英語らしい発音・アイコンタクト・スマイル・ジェスチャー」などに留意させます。そしてお互いにどんなところがよかったか、もっと改善できるところはないかなど、「評価カード」も記入しながら学習し合います。できれば他のクラスや学校との交流も持てれば素晴らしいと思います。とにかく、前述の通り、英語で自分の夢を大勢の前で発表したという経験は、一人ひとりの学習者には大きな自信になるはずで、たとえ失敗した学習者がいても、その努力をたたえ、暖かく励ましてあげることが教師の勤めであることは言うまでもありません。

3年生の場合

Show & Tell は生徒諸君が大好きな活動で、自己表現力と比較文化的思考の養成のために極めて有効なものです。第5課 “Places to Go, Things to Do” では、健、ラトナ、久美が、それぞれ行ってみたい場所について説明します。生徒諸君には例にならって自分たちの行ってみたいところを、その理由をしっかりと考えながら発表してもらいます。学習者の目と心を地球の隅々まで向けさせることができるでしょう。続く DO IT — WRITE 1 では、日本文化についての発信の学習が準備されています。2年第2課 “School Web Reports” では「書道、和紙、うちわ、風呂敷」、2年 LET’S READ 1 では狂言「附子（ぶす）」をもとにしたドラマなどについても学習していますので、その復習も兼ねて、総合的に日本文化を発信する学習活動が展開されれば申し分ありません。

また2年生のスピーチの発展として登場する第6課 “I Have a Dream” も感動を与えるレッスンですし、そのすぐあとの DO IT — LISTEN 5 の TRY にチャレンジできれば文化祭に向けての英語劇のストーリーを作成する活動も組み込まれていますので、生徒諸君の自己表現力には一層の向上が見られるものと期待されます。

さらに第8課では、日本でも50万人以上の人々の大切な言語になっている手話を扱います。ここでは、手話に関心を持ち、身振り・手振り・顔の表情も自己表現には不可欠なものであることを伝えていきたいと思ひます。

おわりに

様々な自己表現活動を成功させるためには、まず聞いて理解してから、次に自分のこととして発表するというステップは必要です。NEW CROWN は「聞く」「読む」活動から、「話す」「書く」活動へとうまくつながるように、意識して教科書が作られており、すべての教材が学習者の自己表現・自己発信につながっていきます。題材に込められた熱い思いを是非大勢の学習者にお伝え下されれば幸いです。

特集 英語を学ぶ視点の育成

家庭での 自主学習と教科書

— 学習方法の視点から

竹内 理 (関西大学)



1. はじめに—カギは家庭での自主学習

「中学の教科書には英語の基礎がすべて詰め込まれている」とよく言われる。しかし、いかによい教科書であっても、そして、いかに技量と熱意のある教師が教えようとも、生徒みずからが教材に働きかけ、これを自分のものにする(=内在化する)努力を行うことなしには、英語の基礎学力はついてこない。英会話学校へ通うだけでは英語力が身につかないのと同じだ。しかし、このような内在化には、かなりの時間をかけた学習が必要になる。毎日たくさんの時間を英語に割くことはできない学校での学習だけでは、残念ながら、到底達成しえない時間数といえよう。そこで、家庭での自主学習がどうしても必要となってくる。本稿では、この自主学習に焦点をあて、2006(平成18)年度版 *NEW CROWN* (18NC) の活用法を考えてみたい。

2. 「基本文の定着」と「音と文字の関係強化」

実践的な英語を習得することが中学にも求められるようになったため、どうしてもリスニングやスピーキングに我々の目は向かいがちである。しかし中学英語には、これからの多種多様な英語学習に耐える基礎力の育成も強く求められているのである。また小学校の英語活動の影響で、音には慣れているが文字はこれから、という生徒も多くなると予想される。そこで、「基本文の定着」と「音と文字の関係強化」が特に大切な課題となる。これに加えて、定着した基本文をアウトプットへと転化していくような活動も必要となる。

3. 基本文の定着

基本文を内在化するためにお奨めの方法は、やはり教科書本文の音読であろう。しかし、ただ音読するだけではあまりにも単調で、よほどの忍耐力がない限り長続きしない。誰も強制しない自主学習ではなおさらのことだ。そこで、単純な音読は数回にとどめておくのがよいだろう。18NCでは、リスニングで重要事項を導入している上に、サウンド・アドバイスのコーナーもあるので、授業中の音読指導とあわせると、家庭での単純な音読活動は3~4回で十分なはずだ。なお、音読をする際には文章を覚えようとしなくても大切だ。覚えようとする、音読自体への注意がおろそかになり、滑らかに読むことがなかなか実現できなくなる。結果として覚えていたらよい、という姿勢で活動に取り組むよう、生徒に最初から説明する必要がある。

スムーズに音読できるようになったら、次はRead & Look-up形式での音読へと進むよう助言してはどうだろうか。長めの文は、意味のカタマリごとにスラッシュを入れておき、そこまで一気に読む。そのあと、読んだ部分を、テキストを見ることなく、顔をあげて復唱する。数回の練習ののち慣れてきたら、ピリオドまで一気に読み進んで文単位のRead & Look-upに挑戦する。スラッシュを入れる活動は授業中に済ませておくと、自主学習に効率よくつなげていけるだろう。このあと、余裕のある生徒には、Listen & Repeatに入ることを奨めたい。音読やRead & Look-upの活動で文章が十分にリハーサルされているので、大きな負担を感じずにできるはずだ。

4. 「音と文字の関係強化」

複数の活動で十分に練習したあとは、和訳から英文を口頭で再現してみる活動はどうであろうか。最近、和訳は目の敵にされているが、英文をしっかり和内在化したあとで使えば害にはならない。要はそれが目的にならなければよいのだ。なお、和訳が目的にならないようにするためには、先渡しで和訳を配付するのが望ましい。

音読やそのバリエーションがおわり、基本文が自分のものになったら、次は和訳を利用して、教科書の英文をノートに再現してみる。音声と文字をつなげる筆写活動は意外と難しいが、スペルや句読法にも意識を向けることができるため、自主学習法にぜひ加えて欲しいものである。この際、WORDSに出てくる単語を先に学習してから活動に入ると、やりやすくなるだろう。なお、単語を学習する時には、アクセントのあるところを意識しながら必ず声に出し、何度も繰り返して書く。つまり、記憶の多重経路化と身体化を行うよう助言しておきたい。

5. Slow Learner はどうする

ここまでの学習を家庭でやるのは大変なことかもしれない。Slow Learner の場合はなおさらであろう。そんな時は、POINT や Talking Point に出てくる基本文まででもよい。あるいは、CHECK IT や Practice で学習する基本文のバリエーションまででもよい。対象文の数を限定して自主学習をさせてみてはどうだろうか。18NC では、基本文とそのバリエーションが厳選されているため、これらが身につくだけでも、大きな自信となるに違いない。家庭での自主学習は、画一的にやる必要はない。むしろそれは避けるべきであろう。すべてをこなせる生徒と、一部分のみを繰り返しやったほうがよい生徒を区別することは、自主学習推進のためにきわめて重要である。

6. アウトプットへつなげたい

基本文が蓄積されてくると、次はこれらを活用して表現する学習をさせてみたい。最初は、WORD BANK や WORD CORNER などに出てくる単語を利用して、基本文中の単語を置き換える程度の活動

になるかもしれない。しかし、言いたいことや身の回りのことを、基本文を使い表現してみるように求めることは、インプットの活動と同じぐらいに大切なことである。たとえば、1週間に3～4文でも構わないから、家庭で英文を書くように奨めてみてはどうだろうか。これをクラスで発表させるような活動とうまくつなげることができれば、学習動機も高まるだろう。なお、作文の際には、その内容を生徒がおかれている環境とできるだけ結びつけるように指導するとよい。また、18NC はコンテンツが充実しているので、教科書の内容と関連づけて、感想や意見を書かせるというのも一案かもしれない。

仕上げは、定着した基本文をコミュニケーション場面で使わせることだ。使用機会がないものには学習意欲は湧いてこない。使用機会増大のために、英語を使うことが自然と思える環境をできる限り増やしていくことが望まれる。E-mail やテレビ会議などを授業で導入するのもよいだろう。家庭での自主学習を生かす機会をできる限り拡大するよう、「環境」と「足場」の提供が強く求められている。

7. 評価をブースターに

自主学習の最大の課題はやる気を持続させることにある。そこで自主学習ノートのようなものを作らせてみてはどうだろうか。これに各自の活動やアウトプットを記録させ、ポートフォリオ的に関心・意欲・態度を評価する。テストでも基本文をしっかりと身につけた生徒が高い得点をとれるようにして、自主学習を重要視しているというメッセージを送る。音読テストのようなパフォーマンス・テストを導入するのもよいであろう。評価をうまく促進剤として利用し、学習の継続性を高めてほしい。

8. おわりに

教室内の魅力あふれる授業と、これを補う家庭での継続的な自主学習。どちらも学習の成功には欠くことのできないものである。教室だけで英語を学ぼうとしても、決して学び切れないことを生徒にはっきりと説明し、家庭での教科書利用法をくわしく教えて、挑戦させる。自律学習の大切さが叫ばれる今、こんな学びの視点も重要ではないだろうか。

HORIZUMI
HAMORU

TAKAHASHI
SADAO

LYNNE
PARMENTER

MORINAGA
MASAHARU

TAKEUCHI
OSAMU

ピクチャーカードの活用方法 — 導入から recitation まで

日 臺 滋 之 Hidai Shigeyuki (東京学芸大学附属世田谷中学校)

はじめに—授業構成を振り返って

様々な授業のスタイルがあると思いますが、日頃の平常授業でよく見かける授業の流れは以下のようなスタイルが多いのではないのでしょうか。

【平常授業での流れと主な活動】

Greeting	あいさつに続き曜日を聞くなど
Warm-up	song, word game, chat など
Review	前時の復習となる活動、発表活動など

Introduction

-Grammar	文法・文型等の導入、その後の pair work 等で練習
-Contents	本文の内容の oral introduction
Reading	一斉読みなどの音読練習
Consolidation	書く活動など
Closing	あいさつ

さて、このような授業をイメージしたところで、授業のどの場面でどのように picture cards を効果的に活用できるのか、太字の部分の言語活動を中心に考えてみたいと思います。

1. Introduction—紙芝居の要領で picture cards を用いて導入する

Picture cards の裏には、教科書本文の英語と Listening Input がパラレルに印刷されています。多忙な教師にとって、この Listening Input はとても参考になります。この英文にほんの少し手を加え、picture cards を示しながら話をするので、本文の内容の introduction を行うことができます。14NC 1年 LESSON 9 ①-1 No.167 の picture card を見てください。

〈表〉



〈裏〉

Listening Input

Ken has a pen friend in England. This is a letter from England.
[Letter] 15 January
Dear Ken,
Thank you for your letter. I received it yesterday.

以下は Listening Input の例（下線部は Listening Input に手を加えた箇所）です。

T: (絵の少年を指さし) Look at this boy. His name is Ken. He has a pen friend in England. This is a letter from England. The letter says 15 January. (と言いながら、あらかじめ 15 January と書いておいた letter を黒板の picture card の上に重ねて貼ります。) Dear Ken, Thank you for your letter. I received it yesterday. ...

このようにして、次の picture card へと進んでいきます。

最後の picture card まで一通り話し終えてから、内容について以下のように質問していきます。

T: Now I have some questions. Who is this boy, S₁?

S₁: Ken.

T: Right. He is Ken. Where is this letter from? Is this letter from the USA, S₂?

S₂: No.

T: Then, where is this letter from?

S₂: England.

T: That's right. It is from England.

Picture card を提示しながら、生徒の理解を確かめつつ question-answering を進めていきます。

2. Reading—音読から recitation へ

Reading の活動は、choral reading から buzz reading, そして read and look-up へと進めていきますが、これだけで教科書の英文がスラスラと頭に入ってしまうというわけにはいきません。もう一工夫、必要になります。Read and look-up のあとに pair reading を行います。次のようなハンドアウトを準備し生徒に配布します。

Pair reading に用いるハンドアウトの例

LESSON 9
A Letter from England

原稿が、イングランドのペンフレンドから手紙をもらいました。ナショナル・トラストのことが話題になっています。

15 January

Dear _____

Thank _____ I _____

You _____ He _____

Last _____ It _____

I _____

1. Where is this letter from?
2. Is the Lake District beautiful?

I play soccer every day.
I played soccer yesterday.

dear receive yesterday ask last summer walk enjoy

England イングランド Peter Rabbit ピーターラビット the Lake District イングランドの湖沼地帯

seventy-nine 79

教室での Teacher Talk の例

T: (After distributing handouts) Boys, look at your handout. Girls, look at your text. Girls, listen to the boys, first. When the boys can't say the lines, please help the boys. After the boys have finished, exchange roles. Girls, it's your turn. Look at your handout. Boys, please help the girls. Now, let's begin.

ここで、隣同士、2人1組になり、男子が最初にハンドアウトを見て、テキストの空欄を補って英文を言います。隣に座っている女子は、教科書を見てパートナーである男子の言う英文をチェックしながら、男子が言えなかったり、間違ってしまった場合は言い直すなどします。次に男子と女子が役割を交代します。

生徒たちは reading の活動の最後に pair reading の活動がくることを知っているので、buzz reading や read and look-up の段階から、教科書の本文を覚えようとする気持ちで1つ1つの活動に取り組んでいるように見えます。

また、reading の活動が活性化する理由として学期末に行っている reading test と recitation test があると思います。この学期末の reading test¹⁾ と recitation test²⁾ が washback effects となり reading により効果をもたらしているように思います。

3. Review

—前時の復習として picture cards を用いる

前時に pair reading まで終えていると、本時では復習として recitation の活動を行うことができます。これには2つの方法があって、1つは「cueとして words を提示する場合」ともう1つは「cueとして words を提示しない場合」です。

① cue として words を提示する場合

暗唱がまだ十分でない生徒にとっては cue となる key words は暗唱を助けてくれます。教師が本文の各文の最初の単語を言ってあげるか、flash cards のようにカードに単語を書いて黒板に貼ってあげるのもよいと思います。教師の cue を待ちきれず、勢いあまって教師より先に言おうとする生徒が出てくればしめたものだと思います。

② cueとして words を提示しない場合

学年が上がるにつれてテキストの難易度も上がり、英文が頭に入りにくい場合もあります。しかし、cueとなる文字の補助がなく教師が picture を指し示すだけで本文が言える段階まで到達すれば、これでひとまずこの活動は終わりにしてよいと思います。

次の写真は Book 1 Lesson 9 の総復習として、すべての picture cards を黒板に掲示し、recitation をしている授業の 1 コマです。教師が次々に各絵をポイントし、生徒が chorus で recitation している様子です。



4. Picture cardsを用いたコミュニケーション活動—picture description のタスク

この Picture description の活動は Show & Tell の活動に似ています。既習のレッスンの picture cards を用いて生徒にその picture について説明してもらうことにより、生徒の表現力をみることができます。

準備として、既習のレッスンの picture cards の中から、各課の特徴をよく表している picture cards を何枚か選びます。また、レッスン名を書いたくじを作っておきます。

Picture description の時間では、生徒にくじを引いてもらい、くじに書かれたレッスンの picture card について英語で説明してもらいます。1人1分で1枚の絵について説明してもらうのがよいと思います。Picture description では、生徒が既に学習した教科書本文の story だけでなく、語句や表現が自分のものになっていないとうまく説明できません。recitation のように覚えた英文を picture cards を見て言う練習から自分の言葉で picture card につ

いて説明するので、一歩進んだコミュニケーション活動と言えると思います。

おわりに—基礎の定着のために

Picture cards を見ながら recitation ができるようになって、しばらくすると内容は覚えているのだけれど、表現する語句が思い出せないということがよくあります。あるレッスンの recitation ができるようになったら、学期末には、2で紹介した pair reading の活動で用いたハンドアウトを使って recitation test を行ったり、picture description をするなど、活動の recycle をすることが効果的です。

また、recitation ができるようになったからと言っても、それとは別に書く練習も必要です。各レッスンが終わったところで、あるいは夏休み、冬休みあけに、既習レッスンの各セクションから日本語を英語で書かせる* written test を実施することも忘却を食い止めるのに役立つと思います。このように、recitation に加えて picture description, written test のあわせ技をうまく利用していくとよいと思います。

* written test の例

教科書チャンピオンをめざそう！

次の日本語を英語で書いてみよう。

1. だからわたしは日曜日には早く起きます。(p.48)
2. 生徒たちは、好きな昼食を選びます。(p.50)
3. ぼくたち授業に遅れるよ。(p.56)
4. メイリン (Meiling) は中国語をわたしに教えてくれます。(p.58)
5. あなたはこの単語を読むことができますか。(p.59)
6. わたしも古い漢字は書くことができません。(p.60)
7. これはだれの竹とんぼですか。(p.64)
8. 彼らは旅行に出かけることはありません。(p.68)
9. 日本には多くの介助犬がいるのですか。(p.69)
10. この前の夏、ぼくは湖水地方を家族と一緒に歩きました。(p.79)

[参考文献]

- 1) 日基滋之 2003 「表現の能力「話すこと」の評価」三省堂 *Teaching English Now vol.1*
- 2) 日基滋之 2004 「語順が身につく授業への小さな提言：中1の授業実践から」大修館書店『英語教育』12月号、pp.22-23



中学校 英語運用能力テスト J.A.C.E. (ジェース)

絶対評価時代の新しい中学用英語テスト

J.A.C.E.の特徴

- 学校での既習事項に準拠した内容 → 定着度評価と弱点診断
- 項目応答理論による絶対評価 → 達成度と運用能力を正確に測定
- 充実した教授用資料 → 評価・学習指導の両面からサポート

(問題別正答率・解答傾向、スコア・レベル別指導例等10種以上の資料をご用意)

テスト実施要項 (2005年度)

テスト実施期間	2005年4月1日～2006年3月末日
対象	中学2年1学期修了(レベル1) 中学2年2学期修了(レベル2) 中学3年1学期修了(レベル3)
テスト時間	45分
受験料	定価500円(税込) 発売記念特別定価300円(税込)
スコア・レポート返却	協会に答案到着後、2週間以内

活用例

- 学期初めの習熟度判定に
- 学期末の実力テストとして
- 全国水準と比較した評価の標準化に
- 週3時間体制対応の効率的指導ツールとして
- 絶対評価のスケールとして



ELPA (英語運用能力評価協会) は、言語能力の測定・評価の専門家、英語教育の専門家及び現場の指導者、英語教科書出版社が参加し、次の目的のために設立されたNPO法人です。

- 英語運用能力の評価に有効なテストの研究・開発
- 英語運用能力を向上させるための、評価法・指導法・教材などの研究・開発
- 学校や自治体に対する英語教育に関する情報提供とコンサルティング活動

特定非営利活動法人(NPO)としての公正なテスト・評価を提供し、教育現場での新しい英語指導、学習の提言を行う。その一環として開発されたのが、この中学用英語テストJ.A.C.E.です。リスニング、文法・語い、リーディングの3分野による構成で、英語学習者の達成度・運用能力を正確に評価します。ぜひ英語指導の一助としてご活用ください。

テストの
お問い合わせ
お申し込み

〒101-0061 東京都千代田区三崎町2-22-14
英語運用能力評価協会 (ELPA)
TEL. 03-3230-9237 FAX. 03-3230-9549

TEACHING ENGLISH NOW 特別増刊号 3号

2005年5月20日発行/定価80円(本体74円)/編集・発行人:八幡統厚

発行所:株式会社三省堂 〒101-8371 東京都千代田区三崎町2-22-14 電話(03)3230-9422(編集)/振替 東京00160-5-54300

[NEW CROWN ホームページ] <http://tb.sanseido.co.jp/english/newcrown/index.html>

印刷:三省堂印刷株式会社 〒192-0032 東京都八王子市石川町2951-9 電話(0426)45-6111(代)

ニュークラウン生徒用教材〈採用品〉

ワークブック 1・2・3

580円 B5判 オールカラー 88頁

学習内容の確認に！ 学習の心強いパートナー

セクションごとに語彙・文法・語法などの基本練習を、各課ごとに総合問題を配置。教科書の題材理解に必要な記事も掲載。



補習ノート 1・2・3

200円 B4判 横開き 31～40枚

習熟度別授業に対応！

英語の習得が比較的遅い生徒を対象にした、教科書の基本文を中心に「読む」「書く」作業を通して英文に慣れるための練習帳。



ドリルブック 1・2・3

420円 B5判 48～60頁

ドリル練習で基礎力アップ！

各課の基本文型を1ページに1項目ずつ取り上げ、基礎的なドリル練習ができる。各課のまとめは単語・語句ドリルと基本文型の発展的ドリルで構成。



リスニングCD 1・2・3

2,100円 12cmCD1枚 テキストB6判 64～72頁

「正しい発音」と「英語を聞く力」をつける！

教科書の本文と単語の読みを、標準的米音で表情豊かに録音。テキストにはCD用のトラックナンバーとアクセントや注意すべき抑揚などを掲載。



ペンマンシップ

280円 B5判 横開き2色刷 40頁

完全準拠だから、教科書と合わせて使える！

楷書体を中心に書き方を系統的に練習できる。



高校入試対策CD

リスニングテストの実戦演習

1,300円 12cmCD1枚 テキストB5判2色刷 64頁

改訂版

パターンをつかんで効率的なリスニング学習

全国都道府県の高校入試リスニングテストの問題を分析し、20のステップを踏みながらテスト形式でリスニング力を養成。



(表示価格は税込)

これらの商品は店売もしております。

英語の基本文型 1・2・3

500円 B6変型判2色刷 (暗記用シート付き) 56頁

基本的な文型・文法の定着を目的に、例文を暗記・活用するための整理帳。左ページに英文、右ページに対応した訳文がある。

英単語集 1・2・3

630円 B6判2色刷 (暗記用シート付き) 160頁

教科書に出てくる単語を残さず収録。教科書の本文を用例文として示し、本文を学習しながら単語の意味を効率的に確認できる。

実力アップ問題集 1・2・3

924円 B5判 オールカラー 128頁

教科書の内容に関する基礎的な力をつけるための総合問題集。各課、学期ごとにまとめの問題を配し、基礎力養成に。

実力完成問題集 1・2・3

819円 B5判2色刷 88頁

教科書の内容理解のレベルアップを図るための総合問題集。高校入試レベルの応用問題も取り入れている。

三省堂

<http://www.sanseido.co.jp/>

□本社

〒101-8371 東京都千代田区三崎町2-22-14 TEL. 03 (3230) 9411 (編集案内)・9551 (営業)
TEL. 03 (3230) 9422 (英語教科書編集部)

□大阪支社
□名古屋支社
□九州支社
□札幌営業所

〒530-0002 大阪市北区曾根崎新地2-5-3
〒460-0008 名古屋市中区栄3-25-43 瑞穂ビル4F
〒810-0012 福岡市中央区白金1-3-1
〒060-0042 札幌市中央区大通西15-2-1 ノヴァ15ビル2F

TEL. 06 (6341) 2177
TEL. 052 (252) 9211・9212
TEL. 092 (531) 1531・1532
TEL. 011 (616) 8722